

## 1999.7.16-7.19 四万十川下り

高橋さんがどうしても休みをとって四万十川を下りたいということなのでまたまた四万十川に行って来ました。

## 四万十川まで

松山までフェリーを使い、松山から四万十川まで車で走りました。前回（2年前）は半家沈下橋～江川崎～岩間沈下橋をガイドつきで下ったのですが、今回は船に TENT を積み込み高橋、松本が 2 人艇 1 艇での単独行で土佐昭和から下ることにしました。

## 1999.7.17 土佐昭和から十川

水量はさすが四万十川、瀬場でもゆっくりと流れ、瀬は十分な水量がありました。しかし、水量が増えているからか水はかなり濁っていて日本最後の清流とは呼びがたい状態でした。各所の瀬では洗剤の泡がたっているのも多くの人が住み、多くの観光客が来る四万十川ではしかたがないことかもしれませんが少し残念です。

ひとつ目の瀬を越えてほっとしたときに前を見ると岩が片側から迫り出しその先端で水が盛り上がっています。この流れで 1 回目の沈をしてしまいました。このときステンレス魔法瓶を流します。

浅いところで舟底を傷つけ、それを修理しながら下ります。十川の集落に着いたのが午後 6 時、集落下の河原に TENT を張ります。夜中雨がひどくなり、増水を気にしながら寝ていたので、ゆっくりと寝ることができませんでした。

## 1999.7.18 十川から江川崎

ゆっくり寝ていたので、9 時 30 分頃十川を出発し江川崎に向かいます。水深の浅い部分にある石は上半分が白く下半分が黒っぽい色になっていて、夜の雨で水量はさらに増えたようでした。さすがに 2 日目になると船のコントロールもうまくなり瀬の中の岩を積極的に回避しながら下ることができるようになりました。とっていると 2 回目の沈。ざら瀬の先が岸に当たって曲がっているところで、返し波に船を揺らされ、瀬からの水流を船の上面に受けひっくりかえってしまいました。半家沈下橋の下の瀬は流量が多く迫力のある波をつくっていました。一昨年 2 人乗りの船が瀬で横向きになり沈下橋の橋脚に引っかかり亡く



なった方がいるということを感じ、この部分は船を引いて下りました。途中、小学生や中学生が泳いでいたり、沈下橋からムーンサルトを決めて飛び込む人がいたりとたくさんの方が四万十川で遊んでいました。飛び込みをしているのは遠目に見ると中学生だと思っていたのですが、実は我々より年輩の大人の人々でみんなではやし立てながら飛び込んでいるのでした。そのような遊び方ができる人を羨ましく思うのでした。2時30分頃江川崎着。

#### 1999.7.19 江川崎から口屋内

8時頃江川崎を発ち、口屋内へ。江川崎の橋の下の瀬は僕が初めて沈した瀬なので気合いをいれて下りましたが、水量が増え流れが直線的になっているので大した瀬ではありませんでした。ここまでは松本が後ろ高橋さんが前という組み合わせで漕いでいたのですがここで前後交代し下ります。2人乗りカヤックは前が漕ぎが主、後ろが漕ぎと舵という役割分担になっているので、前は大変な役どころなのです。江川崎から下流は流れが穏やかになり、流速が落ちしっかり漕がないと前に進みません。途中竹の筏で下るツアーの人々や、初めて乗り方向のコントロールができずに困っている人々と会いながら下りました。口屋内着11時。

昼御飯を食べ、バスの時刻を確認し、野田知佑氏がほめる黒尊川に行きました。黒尊川は水深が浅く、カヤックでは登ることはできないのですが、本当に澄んだ水が流れています。水温が低く長く潜っていると寒いぐらいです。しかし、澄んだ川の中には小さな魚はあふれんばかりにいて（ちょっとおおげさかな）15～20cmぐらいのあゆらしき（種類は判別できませんでした）魚が川底にいて、人の気配を感じると岩の下に潜って行くのでした。いままで潜って遊んだ川の中では一番きれいで一番魚影が濃い川でした。

#### 帰路

カヤックをたたみ、バスの出発時刻の5分前にバス停に向かうとバスは今でたところとのこと。バス停に書いてある時刻の10分前に出発するように変更になっていたとのこと。地元の人以外にはわからないのです。

帰りは道後温泉に入り、島なみ街道と呼ばれる今治 - 尾道間の海峡横断ルートを通って来ました。今治から尾道まで高速道路が開通したと思っていたのですが、実際は橋が開通しただけで途中2カ所は一般の国道を走らないといけなかったのです。勝手に勘違いしていただけなのですが、期待はずれの道でした。

防水使い捨てカメラを流してしまったので写真はありません。10年後にはマレーシアのお金持ちに拾われて、マレーシアに招待される写真を見に行きたいと思います。



